

セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

No.50

発行 2014. 3. 31

編集 佐賀県立九州陶磁文化館

館長 鈴田 由紀夫

〒844-8585 佐賀県西松浦郡有田町戸杓乙3100-1

TEL.0955-43-3681 FAX.0955-43-3324

http://www.pref.saga.lg.jp/at-contents/kanko_bunka/k_shisetsu/kyuto/

E-mail: kyuto@pref.saga.lg.jp



第110回九州山口陶磁展 第1部
(美術工芸品・オブジェ)

文部科学大臣賞受賞

〈白磁鉢〉

中村清吾作

九州陶磁文化館所蔵 中村清吾氏贈

第110回を数える九州山口陶磁展第1部（美術工芸品・オブジェ）で第一席となった作品。

九州山口陶磁展は、会派やプロ、アマチュアを越えて、同じ土俵で審査される公募展。毎年、春の有田陶器市の期間開催されている。

もともと、有田陶器市は、この展覧会の前身であり明治29年に開催された「陶磁器品評会」が発端となったものである。

110回目の第一席は、中村清吾氏の〈白磁鉢〉であった。ろくろ成形という伝統の技によって、白磁という素材の特性を活かし、流れるようなフォルムが印象的な作品である。

～平成26年度特別企画展のお知らせ～

「白き黄金」展 —有田 伊万里 武雄 嬉野の磁器の美と技— (仮称)

○趣 旨

我が国で最初に磁器が焼かれたのは、佐賀県の有田でした。有田では、泉山陶石という磁器の原料に恵まれ、染付をはじめ柿右衛門様式や金襴手様式などの華麗な色絵を生み出し、国内外で高く評価され、影響力のある産地として発展してきました。

有田を中心とした磁器生産が展開するとともに、佐賀県内には、現在の伊万里市、武雄市、嬉野市の各地区でも特色ある磁器生産が展開しました。肥前の磁器産地として技術交流がある一方、これら各地区では、各時代の知恵や創意工夫によって特徴ある製品を生み出し、我が国のなかでも中心的な磁器生産地として現在に至ります。

白く硬い磁器という素材は、そのつややかさと堅牢さで我が国のみならず、海を越えて海外の人々を魅了し、「黄金」にたとえられるなど、貴重なものとみなされてきました。

この展覧会では、有田焼創業400年を前に、佐賀県内各地で生み出された磁器を、産地の特徴とともに紹介し、その美しさと技をご覧ください。

- 主 催 佐賀県有田焼創業400年事業実行委員会
- 会 場 佐賀県立九州陶磁文化館
第1・第2・第3展示室
- 会 期 平成26年10月4日（土曜日）
～11月24日（月曜日・休日）
- 休 館 日 月曜休館（祝日・休日の10月13日と11月3日、24日は開館します）
- 出品点数 150件200点（予定）
- 観 覧 料 有料
- 展示解説 会期中毎週土曜日14:00～15:00



白磁蛩手藤蝶文広口瓶（含珠焼） 1880～1910年代
武雄・小田志窯 九州陶磁文化館所蔵
高取紀子氏贈



色絵印判手仙境図文大皿 1650～60年代
嬉野・吉田窯 九州陶磁文化館所蔵



白磁吉田松陰像置物 昭和12年（1937）
有田・寺内信一（1863～1945）作
九州陶磁文化館所蔵 寺内謙一氏贈

新収蔵品展

- 会 期 平成26年5月16日(金)～6月22日(日)
- 内 容 平成25年度に館蔵品となった資料を公開します。
- 展示数 32件 61点 (予定)
- 会 場 第1展示室



陶胎染付雲堂文香炉 寛文二年(1662年) 銘
肥前・有田窯 九州陶磁文化館所蔵

テーマ展 新春展 吉祥の器

- 会 期 平成26年12月20日(土)
～平成27年1月12日(月・祝)
- 内 容 新春を迎えるにふさわしい吉祥文様の器などを紹介します。
- 展示数 40件 50点 (予定)
- 会 場 第1展示室



色絵松竹梅鶴亀文輪花皿 1720～50年代
肥前・有田窯 ジョン・コーツ氏贈

～平成25年度展覧会の報告～

第110回九州山口陶磁展

○会 期 平成25年4月29日(月・祝)～5月9日(木)
明治29年に「有田陶磁品評会」として発足した本展覧会は、九州山口各県の優れた陶磁器作品を一堂に展示し、伝統的工芸の継承と陶磁器産業の発展を期することを目的として開催され、今回第110回目を迎えました。九州陶磁文化館は、昭和55年の開館以来、第1部の美術工芸品・オブジェの会場となっています。この展覧会は、現在に至り、若手陶芸家の登竜門として定評があります。

今回の第110回展は、全国公募となって初めての展覧会でした。第一位の文部科学大臣賞となった中村清吾氏の「白磁鉢」をはじめ、80点の入賞・入選作品が展示されました。



展示風景 森正洋-使う器-展

新収蔵品展I 寄贈記念 森正洋-使う器-

- 会 期 平成25年5月17日(金)
～6月16日(日)
- 内 容 佐賀県塩田町(現嬉野市)出身の世界的陶磁器デザイナーであった森正洋(1927～2005年)のデザインによる陶磁器が寄贈されたことを記念した展覧会。およそ1000点を第1～第2展示室で紹介しました。展示では、テーブルコーディネートコーナーや、実際に手に取って、体験するコーナーなどを設けました。また、森デザインによる器と、古伊万里とを比較してお互いを対話させる手法でそれぞれの特徴をきわだたせる展示を試みました。



体験コーナーの展示 森正洋-使う器-展

新収蔵品展Ⅱ

- 会 期 平成25年6月21日(金)～7月15日(月・祝)
- 内 容 平成24年度に寄贈を受け、新たに館蔵となった唐津や伊万里といった佐賀県の陶磁器をはじめ、九州の陶磁を中心とした館蔵品200件249点を展示しました。また、十四代今泉今右衛門氏(平成23年度日本陶磁協会賞受賞)から襲名10周年を記念して御寄贈いただいた「色絵薄墨墨はじき雪文鉢」などの現代作家による作品も注目されました。
- 会 場 第2展示室

テーマ展

夏休み やきもののバードウォッチング

- 会 期 平成25年8月3日(土)～9月1日(日)
- 内 容 鳥にスポットをあて、古伊万里から現代作品まで、やきものに表現された鳥たちを展示しました。会期中、夏休み中のこども向けイベントとして、「鳥をさがそう!かこう!ジグゾーパズルとマイ風鈴づくりに挑戦」と題し、参加型の体験イベントを開催しました。子供たちは展示されているやきものを熱心にスケッチし、クイズやパズルに挑戦していました。
- 展 示 数 64件108点
- 会 場 第1展示室



「鳥をさがそう!かこう!ジグゾーパズルとマイ風鈴づくりに挑戦」の様子



新春展 干支 馬の文様

- 会 期 平成25年12月14日(土)～平成26年1月13日(月・祝)
- 内 容 平成26年の干支である“馬”にちなんで、馬の置物や馬の文様の陶磁器などを展示しました。「春と馬」、「馬?それともロバ?」、「馬と猿は仲よし」、「瓢箪から駒」などのテーマに沿って、馬にこめられた意味や表現に傾向があることを紹介しました。
- 展 示 数 41件113点
- 会 場 第1展示室

第9回 やきものとひなまつり

- 会 期 平成26年1月28日(火)～3月23日(日)
- 内 容 「柴田夫妻コレクション」の寄贈者である柴田祐子氏所蔵の古人形と雛道具、当館所蔵の古陶磁「色絵菊竹鳥文大皿」などを展示しました。また「ひなまつりぬりえ展」と題して、有田町内の保育園と幼稚園児が描いたぬりえを展示しました。このほかにも、会期中は2月1日(土)に「ひなまつり茶会・音楽会・伊東久重氏(御所人形師)講演会」、3月1日(土)に「お好きな古伊万里で甘酒を」といった関連イベントで、来館の方々に楽しんでいただきました。
- 展 示 数 約200点
- 会 場 館内の随所



「ひなまつり音楽会」

江戸のモダニズム こだけお 古武雄 ～まぼろしの九州のやきもの～展

- 主催 佐賀県立九州陶磁文化館
- 会場 佐賀県立九州陶磁文化館
第1・第2展示室
- 会期 平成25年10月5日(土)～11月24日(日)
- 休館日 月曜休館(祝日の10月14日と振替休日の11月4日は開館)
- 出品点数 85点(うち佐賀県重要文化財1点、武雄市重要文化財4点)
- 観覧料 無料
- 展示解説 10月5日(土)より毎週土曜日
14:00～15:00

○展示内容

江戸時代、肥前・武雄地域で創出されたやきものは、近年、「古武雄」の名で知られるようになりつつあります。躍動感あふれるデザインや大胆な色づかいで飾られ、九州の陶器の中でもひとときわ個性的です。豪快な屏風絵のように力強く大胆な筆使い、コントラストが効果的でリズムカルな連続文様、即興的に掛け流した色鮮やかな釉薬など、多彩な表現がみられます。

展覧会は、武雄が生んだ独創的で華やかなやきもの美しさを紹介するものとして企画されました。選りすぐりの逸品を公開し、古伊万里など同時代のやきもの

のとの比較も交えて古武雄の魅力をあますところなく紹介しました。魅力を伝えるための試みとして、展示室の一角で、「男がもてなすイタリアン」をテーマに、所蔵品の古武雄と現代の武雄のやきものを使ったテーブルコーディネートコーナーを設けました。

展覧会期間中は、武雄物産館の協力で、「武雄物産市in九陶」として、期間限定の出張店舗による名産品の販売コーナーを設置しました。

また、館内のカフェテラス「彩」では、現代の武雄焼のやきもので食事を提供するサービスもありました。

このほか、下記のイベントを開催することで、古武雄をはじめ、陶磁器を民俗芸能や音楽とともに鑑賞する機会を設けました。

- 10月5日(土) 古武雄茶会
- 10月20日(日) 武雄の荒踊(国重要無形民俗文化財)
出演：高瀬荒踊保存会
- 11月3日(日) ジャズin九陶ナイト～ジャズとやきものと佐賀ん酒～
- 11月17日(日) 古伊万里とチェンバロの出会い～悠久のバロックの響き～



展示風景



テーブルコーディネートのコーナー



「古伊万里とチェンバロの出会い」



武雄の荒踊り九陶公演



「ジャズin九陶ナイト
～ジャズとやきものと佐賀ん酒～」

ヨーロッパの肥前陶磁器を訪ねて10

17、18世紀にスペイン統治下にあった シシリーのパレルモとキューバの ハバナに残る色絵の肥前磁器

Hizen Polychrome Porcelain found in Palermo, Sicily and Havana, Cuba, both under the Spanish Rule in the 17th and 18th Centuries

2006年、キューバ訪問の後に、イタリア半島の先端にあるシチリア (Sicilia) 島の首府パレルモ (Palermo) を訪れた。17、18世紀にはスペイン統治下にあったこの地の王宮や元貴族の館に飾られている盛期の色絵の肥前磁器を、同じくスペイン統治下にあったキューバのハバナに残る色絵の肥前磁器と共に報告し、伝播の経路を考えてみたい。

1. キューバのハバナ市に残る肥前磁器

1959年のキューバ革命で富裕層が国外に逃れ、肥前磁器もその際にハバナから持ち出されたのか、現在見られる数は少なく、しかも17世紀のものはない。距離的に近いアメリカのマイアミ (Miami) 地域の美術館で肥前磁器を見たという情報もいまだに聞こえて来ない。もっともハバナは単なる中継地点であって、ここでの生活に肥前磁器は使われなかったのかもしれない。

ハバナでは、旧市街の元スペイン総督邸 (Palacio de los Capitanes Generales) と、コロニアルアート博物館 (Museo Arte Colonial) にそれぞれ1対ずつ、全く同種の色絵の蓋付壺が4個あり、蓋の摘みには動物、またはなにかが乗っていたことを示す痕跡が残る。器面は腰の部分に花枝文を巡らし、その上の肩の部分に花籠文を巡らすという文様で、他に類例を見ないのである (図1)。その他、蓋に金属の摘みを付けた蓋付壺が1対 (図2) ある。アジア美術館 (Museo

TANAKA, Shigeko

田中 恵子

- 日本アジア協会副会長
- 東洋陶磁学会 (日本) 会員
- The Oriental Ceramic Society (London) 会員

Casa de Asia) には色絵の蓋付壺が1個 (図3)、明治以降に日本各地からもたらされた陶磁器と共に飾られている。このほか、装飾美術館 (Museo de Artes Decorativas) に明治時代の背の高い染付の花瓶が1対あるが、ヨーロッパでよく見かける17世紀の染付の蓋付壺は、中国、日本とも全く見当たらない。

2. シチリア島のパレルモ市に残る色絵の肥前磁器

1) 王宮 (Palazzo dei Normanni) には肥前の色絵の蓋付壺が7個 (図4~9)、中国清朝の蓋付壺と一緒に飾られている。ここでも染付の肥前磁器は見当たらない。

2) ミルト宮殿 (Palazzo Mirto) は1982年に、そのまま公開するようにとの条件で、元貴族のフィランジェリ (Filangieri) 家の末裔から市に寄贈された18世紀の館で、この一族はナポリの貴族とも縁戚関係にある。ここには筒型瓶が5本、蓋付壺が7個あり、そのうちの1対の蓋付壺 (図10) は「セラミック九州」No.40で紹介したイタリアのジェノヴァ (Genova) の元貴族の館にある3個の蓋付壺や大英博物館所蔵の1対と同じタイプで、窓の中の染付による花枝文の流麗な描き方は同一人物の筆になるものと思われる。その他、時代が下がると思われる別の1対の色絵の蓋付壺 (図11)、及びもう1個の蓋付壺 (図12)、中国室と呼ばれる部屋にある1対の蓋付壺 (図13) にも蓋の上に人形や動物らしきものが乗っており、2本の筒型瓶に



図1
色絵花盆文蓋付壺
1700-30年代



図2
色絵貼花文蓋付壺
1710-1740年代



図3
色絵幔幕花文蓋付壺
1700-1740年代



図4
色絵菊唐草文蓋付壺
1700-1730年代



図5
色絵牡丹獅子文蓋付壺
1700-1740年代

は金属の装飾が取り付けられており（図14）、小型のものとしては蓋と受け皿を伴った色絵のチョコレート・カップが3組、高さ35cmの人形が男1体、女3体あり、いずれも18世紀の製品である。ここでも染付は肥前も中国のも見当たらない。

3. まとめ

17世紀半ば、イベリア半島から地中海に奥深く入ったシチリア島をスペインが統治していた時期と、肥前磁器が太平洋を越えてイベリア半島のカディスまで到達した時期は重なってはいるものの、シチリアのパレルモで現在見られるものに、17世紀に生産されたことが確実な肥前磁器はない。

イベリア半島の地中海側の貿易港であるスペインのバルセロナ（Barcelona）とヴァレンシア（Valencià）を訪問し、バルセロナでは中国とスペインからの陶工がメキシコの陶工に協力して、メキシコの陶器生産の発展に大いに寄与したという趣旨のメキシコからの展覧会を見た。しかしながら、そこには肥前磁器への言及はなかった。ヴァレンシアでは国立陶磁器美術館

（Museu Nacional de Ceràmica）の収藏品調査も行ったが、17世紀からの肥前磁器はなく、肥前磁器の発掘遺物の報告もないとのことであった。カディスから先、シチリア島のパレルモに至るまでの中継地での肥前磁器伝世の様子は全く見る事が出来ず、カディスから更にスペイン商人によってシチリア島まで運ばれたことへの痕跡は確認できていない。

パレルモの王宮を飾る肥前の色絵蓋付壺の多さと質の高さは他に類を見ず、収蔵庫に他の器種もあるか、更に知る機会を早く得たい。一方で、シチリアはスペインの後フランスのブルボン家の支配下に入るが、「セラミック九州」No.40に掲載した「イタリアの有田磁器を訪ねて」で紹介したナポリ（Napoli）、ローマ（Roma）、フィレンツェ（Firenze）、ミラノ（Milano）、ジェノヴァ（Genova）などのイタリア各地にある肥前磁器のコレクションは、フランスとの縁が深い。パレルモの王宮の肥前磁器のコレクションの由来を知るには、まず収蔵庫の調査をしてこれらイタリアをはじめとする他のコレクションとの関係を知ることが必要であると考えている。

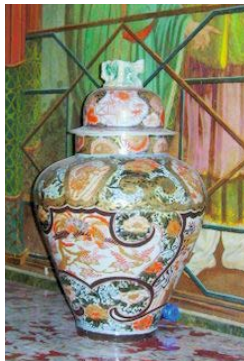


図6
色絵花鳥文蓋付壺
1700-1740年代



図7
色絵牡丹獅子文蓋付壺
1700-1740年代



図8
色絵花鳥文蓋付壺
（蓋は別物）
1700-1740年代



図9
色絵窓絵短冊文八角壺
（蓋は別物）
1700-1740年代



図10
色絵蒔絵花卉文蓋付壺
高さ89cm
1700-1730年代



図11
色絵唐人文八角蓋付壺
高さ72cm
明治か



←図12
色絵婦人文蓋付壺
高さ81.5cm
1710-1740年代

図14 →
色絵筒型瓶
高さ60.5cm 18世紀前半



図13
色絵蓋付壺
高さ52cm 18世紀前半

シリーズ やきものの技法(45)

櫛描

櫛歯状の道具を用いて、平行線状の文様をあらわす技法。古くは弥生土器などにもみられる。九州陶磁でこの技法の作例が多いのは、武雄を中心として生産された陶器である。白い泥状の白化粧土を器面にかけ、白化粧土が乾くまえに道具をあてて白い土を削ることでその下の褐色の部分の線状にあらわれる。ロクロに乗せた状態で道具をあて、回転させつつ櫛歯状の道具をあて、さらに一定のリズムで動かすことで、リズムカルな曲線を生み出す。

この技法を用いて装飾する部分は、瓶や甕などの袋ものの胴部や、皿の見込み部分である。袋物の胴部の場合、ぐるりと側面を一周し、起点と終点の重なりがみられることがある。皿の見込みの場合も、起点と終点があるが、その重なりは美しく破たんがないように上手に処理されている。写真の作例は、中心部の星形のような文様と、その外側の五弁の花状にみられる部分、さらにその外側を一周する波状の部分、そして口縁部の格子状の文様が櫛描きによってあらわされている。五弁の花状にあらわされた文様は、櫛歯の道具を大きく動かした曲線部分と、小さく動かした曲線部分とで構成され、起点と終点の部分は上手につじまがあうように処理されている。口縁部は縦方向に櫛歯をあて、複線をほどこし、さらに横方向に櫛歯をあてて格子状の文様をあらわしている。

以上のような技法は、白い文様をあらわす象嵌技法の展開にあるものと考えられる。象嵌技法は彫る、削るなどの細かい緻密な工程が必要である一方、白化粧土に櫛描きをほどこす装飾技法は、短時間でより動きのある装飾が可能であり、この作例は、さらに緑と褐色の釉薬を流しかけることで、ダイナミックな装飾性が生み出されている。

(藤原友子)



櫛刷毛目文大皿(二彩手)
肥前・武雄窯 17世紀中頃～後半
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵

シリーズ やきものにみる文様(45)

桜樹馬文

日本における馬は、4世紀末以降、大陸で家畜化されたものが移入したものとされている。馬はそのたくましく美しい姿から、世界各地で古代から現在まで、さまざまな美術工芸品にあらわされてきた。我が国でも、古墳時代の馬形の埴輪をはじめとして、やきものに馬の姿をあらわしている。

馬を表現するには、頭、首、脚のバランスが必要で、一頭描くのに画力が必要である。美しく力強く、また、武家としての権威や財力の象徴ともなる馬は独立した画題となり、「厩図」や「群馬図」など、みごとな屏風絵が知られている。著名なのは雲谷等顔(1547～1618)の群馬文屏風で、これについては、当シリーズ37号「群馬文様」で紹介されている。

肥前磁器の馬の文様にみられる傾向には、「春」の風情とともに描かれることが多い。桜と馬、若松と馬、春草と馬の文様が多く見られる。かつて、馬といえば春を連想するものだった。馬の活動期が春であることも一因しているのであろうが、文様流行の背景となるのは文学や芸能にあるものと想像される。のびのびと春の野原で遊ぶ風情は季語「春の馬」となり、「春駒」という玩具や、「春駒」という新春芸が江戸時代に流行した。また、江戸時代に流行した歌に「咲いた桜になぜ駒つなぐ 駒が勇めば 花が散る」という民謡があり、桜と馬の組み合わせの文様が多い。馬といえば桜とした共通概念が当時にはあったことを示している。

陶磁器業界では、商売繁盛を祈り、左向きの馬の絵の製品や馬の文字をうらがえしの鏡文字に記した「左馬」の字を書いた製品を、その年一番の窯に入れて焼く縁起担ぎも行われている。「左馬」は「うま」を左右さかさにして「まう」と読み、「まう」は舞い上がる運氣を示すものとされる。

(藤原友子)



色絵 桜樹群馬文 八角壺部分
肥前・有田窯
1690～1730年代 佐賀県重要文化財
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵